
呪いの詩 ウ・オタギラ

早浪討矢

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

呪いの詩 ウ・オタギラ

【Nコード】

N9935D

【作者名】

早浪討矢

【あらすじ】

ネット上で密かに噂される、声に出して読むと必ず死ぬ呪いの詩
ウ・オタギラ。これは、ふとしたきっかけで、その詩を知った一人
の少女の物語です。

「ウ・オタギラ」

アチサ ミアゾ グ・オタギラ
オタギラの森に 月が墮ち

ウコ ツウ トグ
夜空が 割れた

サミシ ムサヨ エダ ムタ ナ・ラケロ
人は 眠りの世界から 戻れない

クセ ツ・オタギラ
オタギラは笑う

オリ オリエ ダマミ
朝は もう来ない

傾いていた陽光が、朱色を鮮やかに帯び始めた頃。

私立フローレンス小学校。

そのレンガ造りの正門に少女が一人、体をあずけもたれ掛かっている。

彼女はぼんやりと、空の色が変わっていくのを静かに眺めていた。

小学校の前は道路を挟んで、小さなクリーニング屋や雑貨屋などが4件ほど連なっていた。

買い物帰りのおばさんたちが電柱の側で輪になって、いつものように騒々しく世間話に花を咲かせている。

「そうなのよ、奥さん聞いた？」

「聞いたわよソレ、変な話よねえ、まったく」

「そうそう。私も、はじめから何か嘘っぽいなって思ってたのよ」

「ホントよねえ」

そんな声を遠くに聞きながら、少女はその二つに編み分けた長く艶やかな髪に、小さな細指を絡ませて、微かなため息をついた。

「ごめんよお、ミキちゃあん」

校舎の方から声がして、別の女子児童が息を弾ませて駆け寄ってくる。

ミキと呼ばれた少女は、その声に振り向いて一瞬うれしそうに表情を浮かべた。

でもそれは、すぐにいつもの顔に戻る。

切れ長の瞳のせいか、ミキの素の顔は、人より一層クールに見えた。

「ちよつとお、真央ちゃん。いつまで待たせるのよ」

ミキは、追いついて呼吸を整えている少女に問いかけた。

「ごめんね…… ちよつとイナバ先生に呼び出されてたの」

肩まである真央の髪は、少しクセがあり自然にカールしている。

それは、夕方のオレンジの光に照らされて、やわらかでほんわかした雰囲気とその表情に漂わせる。

「それは真央ちゃんが、また宿題忘れたからでしょ」
とミキが指摘すると

「えへへへへ」
と真央は小ウサギのように微笑んだ。

それを見た、ミキの表情が一瞬引きつったのは、真央の可愛らしさを前に、心が溶ろけてしまいそうになる自身を、押さえるためだったのかもしれない。

「えへへじゃないよ。まったく」

そう言い捨てると、ミキは踵を返して校門前から住宅街の帰宅路へと歩き始めた。

半歩遅れて、綿のように弾みながら真央がついて歩く。

「ミキちゃんって、やさしいね」

舌つ足らずな声で、後ろをついて歩く真央が言った。

「え？」

驚いた表情でミキは真央に顔を向ける。

「だって。いつも私に親身になってくれるもん」

「べ… 別にそんなんじゃ」

と言いかけたミキの言葉を遮って

「今日も待つててくれて。真央うれしいよ」

ほころんだその笑顔には、女のミキでも、ギュッと抱きしめたく
なるような衝動にかられる。

(ズルイなあ… それ)

と内心思いながらミキは

「今日こそは宿題忘れちゃダメだからね」と、さとす。

今日の宿題は、国語でノート1ページ分の詩を作ってくることだ
った。

「明日の朝の会で提出しないと、また先生に怒られるよ」

「うん。でもね…」と真央が言い、そのまま押し黙る。

やわらかな風が真央のショートヘアを軽くなびかせて、こがね色
の小さな光の欠片を乱反射させた。

なかなか続きを話そうとしない真央に、苛立つ振りをしながらミ
キは言った。

「でも何？ 会話止めないでよ」

「う、ごめん… あのね。あたしのうちお母さん遅くまで働いてる
から。弟とお父さんのゴハンの支度とか、いろいろしなくちゃいけ
なくて……」

「そ… そうなんだ。でも、そんなのお父さんにしてもらえばいい
じゃない、真央ちゃんのお父さんが大事でしょ？」

「うん。だけど、お父さん、今、体弱くしちゃって、病院と家と

を行ったりきたりだから…」

「そ… そうなんだ」

「あたし、お父さんにいつぱいいつぱい笑っててもらいたいんだ」

二人は公園の入り口を通り過ぎた。

その公園の奥のほうから、男の子たちが無邪気に遊んでいる声が響いていた。

真央は自分の言葉の重みも意に介さず、相変わらずほわほわと、浮くように歩き続けている。

「よーし、それじゃ今日は私が真央ちゃんの分まで宿題してきてあげるよ」

腕まくりをしてみせながら、ミキは言った。

「ほんとおー！」

「うん」

「わーい。やったあ、やったあ、ヤッターマーン」

真央が無邪気に喜ぶ姿に、ミキは目まいがしそうになった。かろうじて「何なのそれ？」と聞き返す。

「知らないの？ 昔のアニメだよ。お父さん好きなんだ」

「知らないよ。変なフレーズ」

ミキは思わず吹き出した。

真央もつられて口を開けてあははははと笑う。

住宅街の帰り道。二人の笑い声がやさしく世界に木霊した。

*

その晩ミキは自宅のリビングで、夕食前に真央から預かったノートを開き、自らの思考回路と格闘していた。

「何やってんだ？」

塾から帰ってきた兄貴が通りすがりに声をかけてくる。

「宿題よ。宿題」

正直ウザイなと感じながら、ぶっきらぼつにミキは答えた。

「ぶっん。どれどれ」

「きゃ、何覗いてんのよ」

「照れんなよ、小学生」

「て、照れてなんかないわよ。こつこつってプライバシーの侵害よ」

そんな風に、覚えてたての言葉で口を尖らすと

「利いた風な口聞くな小娘」

と言つて、バカ兄貴はミキの細い足首を取り、四の字固めをかけるくる。

「あ〜ん。ちょっと待って。おかーさん、お兄ちゃん横暴よ」

ミキはキツチンに立つ母に助けを求めた。

「あらあら、仲のいいことね。でも、戸棚の花瓶は倒しちゃイヤよ」
一瞬振り返って微笑んだ母は、再びまな板に顔を戻すと、キャベ

ツをテンポよく切り刻む音を奏で始める。
さつきからリビングにずっといる父は、ノートパソコンに向かって、仕事の書類を整理していて、表情一つ変えない。

「ちえっ。離せ馬鹿アニキ、今時の高度なプロレスで四の字でギブアップが取れるもんか！」

「じゃ、本気で締めよう」

兄は一層引き手に力を込めた。

「うわ~~~~ん。まいりましたー」

フローリングの床にへたったミキを尻目に、兄はノートを取り上げる。

「なんだよ、出来てんじゃん」

「ちがうよ。そっちは私の、もう一個作らなきゃいけないんだよ」
「なんで？」

ミキは真央とのくだりを話す。

「ふむふむ。なるほど妹よ」

「何よ！ 偉そうに、バカ兄貴！」

「…お前騙されてんだよ」

「は？ 何言ってくれちゃってんの」

「真央ちゃんのお父さんは、俺の中学校の英語教師だぞ。今日もエババディハワユー、いいえ、それはペンではありません。と分かりきったことを俺につつ込ませてたぞ」

「だから？」

「彼は病気ではありません」

・ ・ ・

「くっそおおお、またあの小動物スマイルに騙されたあ、でもあの子のノートを預かっている以上。宿題やらないわけにはいかないもんなあ」

「ふふふ愚か者め、哀れな妹よ兄が秘策を授けよう」

「何するの？」

兄貴は鉛筆を取ると、真央ちゃんのノートにスラスラと何かを書き込み始めた。

「何これ？ え〜っと ウ・オタギラ…？」

「ストップ！」

ミキが、書かれた文章を読み上げようとしたのを、兄は制する。

「気をつける、我が妹よ。これは口に出して読めばかならず不幸が訪れる呪いの詩だ」

「へ？」

これはネットでまことしやかに流されてる都市伝説の類とは一線を画すお話なのだが。

昔々、戦後まもなくのシベリアでな……

太平洋戦争末期。

ソビエト連邦軍の満州侵攻によって多数の旧日本軍兵士が捕虜になった。

その大半は、帝政ロシア時代から流刑地として使われてきたシベリアの、各収容所に送られ抑留される。

そこは、永久凍土にほど近い極寒の地。

そういう過酷で劣悪な環境下で、彼らは強制労働に従事させられることになった。

そこでは労働だけでなく、共産主義の教育も、ロシア人監視官によって定期的に施され、日本人捕虜の中でも、もともと共産主義的だったたり、隠れ共産党員だった者たちが優遇され、大手を振うようになる。

ロシア人監視官たちは、教育プログラムの中で、「革命」や「階級闘争」の思想を育てるため、日本人捕虜の兵卒や下士官に元上官に対する暴行をも強要した。

さらに共産主義者の日本人捕虜は、収容所内の生活で「民主運動」を行い、革命思想を持たない捕虜を「反動分子」「前職者」などと呼び、労役の合間を縫って、彼らに執拗な吊るし上げや露骨なリンチなどを行った。

死者も出た。

シベリア、中北部にあるオタギラ集落そばの収容所も例外ではない。

ある夜、反動分子として虐げられていた一人の日本人捕虜が行方不明になり、翌朝、老朽化のため普段使われていない穀物倉庫で、口から血を噴きながら半分凍りついた遺体で見つかる。

そして、ロシア語でウ・オタギラ（オタギラの森）という不思議

な詩の文句が、彼自身の血文字によって、壁一面に書き込まれていた。

その事故（そう処理された）が起きたオタギラ収容所では、日本人捕虜、ロシア人監視官とともに、不可思議な死亡事故が、その後あいついで起こる。

噂は広まり、オタギラの森の詩を口にしたものは呪い殺されると、収容所の外部にまで洩れ伝わった。

1947年、日本本土から訪問した社会党視察団は、シベリア抑留者の強制労働に対する実情を握りつぶし、環境にも食事にも問題はまったくみられないと、国会での虚偽の報告をおこなった。

1952年抑留者であった横沢秀雄（元陸軍伍長）が帰国したおり、その事実には憤り、集会や講演をはじめ様々な政治活動を始めたが、公安警察にマークされ、数々の嫌がらせ行為により病に倒れる。

死の一ヶ月前、彼は友人知人をつたい、一人の文筆家に噂で耳にしたオタギラの森の前文の翻訳を依頼する。

快諾した詩人、藤田マサトは1959年、詩集「岸壁の待ち人」のなかに和訳された「オタギラの森」を収録し発表した。

時は流れ、

1982年 劇作家である 大道寓一はその詩の由来を知り、自身がパーソナリティーを務めるラジオ番組で、声に出して読んだ人の身に必ず不幸が起こる「呪われた詩」として紹介し、実際に放送中朗読した。

しかし、ウ・オタギラの詩を読みあげている途中に眩暈に襲われ、朗読は中断している。

そして、彼が数カ月後に薬物事故により死亡したことで、この詩

の噂が、全国のおカルトマニアに広まったと考えられる。
(ウィキペディアより抜粋)

「やだ、何してくれちゃってんのよ、コワイじゃない」
「かかかかか、これにて一件落着ーっ」
兄が胸を張って、高々と決めゼリフを言った。

そこですかさず、
「さあさあ、桜吹雪が舞い散ったところでゴハンにしますよ。みんな、手を洗って席に着きなさい」
と母親がテーブルに家族を呼ぶ。

「おかーさん、お兄ちゃんがね」ミキが抗議するが
「はいはい。さ、おとうさんも手を止めてくださいな」
と母は聞く耳を持たない。

「よし、ごはんにしよう」
その時はじめて父は声を出し、のっそりと動きだした。

*

(…………ぎじじつよひ)

ミキは心の中で何度もこの言葉を繰り返している。

次の日の朝の会で、結局ミキは昨日兄が書いた詩を、真央の分として提出してしまっていた。

真央ちゃんがああ詩を声に出して読んだら、真央ちゃんに良いことが起きちゃうよ。

だが、無情にも午後のチャイムが鳴り、担任のイナバ先生が毅然と扉を開け教室に入ってきた。

「起立ーっ！」

「礼」

「着席」

クラス委員が号令をかけた。

スレンダーなイナバ先生が教壇に立ち、国語の授業が始まる、いよいよ詩の朗読だ。

だが、イナバ先生は、胸元の大きく開いた白いブラウスの襟元を正してから、おもむろに教壇を降り、抱えていたプリントをクラス全員に配り始めた。

「今朝集めた宿題ですが、みなさんそれぞれに発表してもらう前に、なかでも大変素晴らしい詩を作ってきてくれた人がいるので、紹介します」

「え？……」

まわってきたプリントにミキが目を通すと、そこには例の呪いの詩が印刷されている。

先生は眼鏡のつるを二本指で軽く挙げて、クラス中を見渡しながら言った。

「それは真央ちゃんの詩です」

「何でなの？」

驚くミキ。

「それでは、各自の発表の前に、真央さんが作ったこの素晴らしい詩をみんなと一緒に朗読しましょう」

(え〜〜〜〜？)

しかし、そんなミキの心の叫びなどお構いなしに、イナバ先生はみんなを促した。

クラス全員が声を出して、呪いの詩をゆっくりと読み上げ始める。

『オタギラの森に、月がおち…』

(どうしよう…)

ミキは口を動かさない。

真央がミキの席を、一瞬振り向いて、笑顔でありがとねと小さく手を振るがミキは呆然として気付かない。

「みなさん！ ちょっと読むのをやめて」

ミキの様子に気付いたイナバ先生が、途中で、みんなの音読を止めさせた。

「どうしたのミキさん？ ちゃんと読みなさい」

「……」「うつむくミキ。」

「返事は？ ミキさん」

「……すみません」ミキはほとんど聴こえないようなかすかな声でつぶやいた。

「どうしたの？」

ミキは意を決して、顔をあげ。

「すみません先生……私、この詩読めません」

とイナバ先生に答えた。

「どうして？」

「……すみません」

「そう……答えられないの」先生の口調が冷たく変わる。「わかったわ。私の授業に参加できないということね。そんな子は、このクラスにいない必要はありません。今すぐこの教室から出て、廊下に立っていなさい」

先生は凜と透き通った高い声でそう告げると、厳しい目つきでミキに扉を指し示した。

*

ミキは廊下に立たされていた。

人気ひとけのない、その空間の寒々しさは、今の彼女には気が遠くなるほど長く広がった。
御影石に模された、つや光りする床のタイルさえ、冷たい緊張を広げてくるようだ。

壁一枚隔た教室からは、みんなが大きな声で、楽しそうに詩を朗読する声が聴こえてくる。

壁の向こうから届くその響きが、今のミキの心細さを、さらに浮き彫りにしているようにさえ感じた。

「あゝあ、呪いの詩なんて提出するんじゃないかった」
肩を落として、ミキはつぶやく。

ふと顔をあげると、窓の外で何かが光った気がする。

よく見ると、それは小さな白い羽だった。

空の高いところで風に乗る、ふわりふわりと舞っている。

「あら？ 天使の羽みたい」

それはゆっくりとそして静かに、天上から、なだらかな渦状の弧を描きながら、揺れるように降りてくる。

ミキは、その白い羽のワルツを見ていると、不思議と心の中が締め付けられた。

自分がとても恥ずかしくて、切なくて、苦しかった。

天使の羽が、はらりはらりとひるがえる。

(神様ゴメンなさい。ミキは、もう二度と誰かを呪おう何て考えません。本当にゴメンなさい)

ミキは心の中で叫んでいた。

そして、先生に謝ろうと思った。

先生に謝って、みんなと一緒にあの詩を読もう。

意を決したミキは、足を踏み出して、みんなが楽しそうに詩を読み上げている、教室の扉に手を掛けた。

小鳥のさえざる学園風景。

いつもと変わらぬ午後の授業時間。

その瞬間、平穏だった私立フローレンス小学校の校舎が一瞬揺らぎ、突如として、大轟音がその敷地を飛び越えて街全体へと響き渡った。

*

田園都市のいびつな地平線に、哀しく夕陽が閉ざされていく。

世界は無情にもその色彩に、蒼色の影を次第に深く濃く、掘り込んでいった。

私立フローレンス小学校のレンガ造りの正門の前には、今や無数の人だかりが出来ている。

消防士と救急隊員が激しく往来し、メディアの取材陣はその情景を照明でこうこうと照らし続ける。

激しい嗚咽、すすり泣く音。指示を出す怒号。

遠巻きに眺めている保護者や生徒たちは、現実の状況をどう受け止めればいいのか、わからないままだった。

ただただ呆然と、その場に立ち尽くしているだけで。

「ねえねえ聞いた？」

電柱の側で、いつも輪になっているおばさんたちが、通りがかつた知り合いを呼び止め、話かける。

「何の騒ぎなの、コレ？」

「何でも二年生の教室で、天井のパネルが一斉に剥がれ落ちたらしいわよ」

「えっ そうなの？」

「手抜き工事らしいわ。怖いわねー」

「本当ねえ」

「ホント可哀想にねえ」

「クラス全員、重体だそうよ」

「まあ、恐ろしい」

「怖いわよねえ」

「本当にねえ」

「かわいそうに」

「ホントよ」

「…うちの子は公立でよかったわ」

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9935d/>

呪いの詩 ウ・オタギラ

2009年4月24日05時06分発行